

TOPICS

環境総合研究センター

環境総合研究センター長 中野 桂

環境問題は、古くは水俣病、第二水俣病(新潟水俣病)、イタイイタイ病、四日市ぜん息などの公害問題などが知られていますが、それ以外にも、身近なところではゴミ問題、外来種問題、内分泌かく乱物質問題(いわゆる環境ホルモン問題)、さらに地球規模では、オゾン層の破壊、地球温暖化問題、異常気象といった大きな問題などいろいろあります。東日本大震災でも、原発事故がおこり、未だに放射能の放出は止まらずに、収束の方向性すら見えていない状況にありますが、これも地球規模の深刻な環境問題です。

環境総合研究センターは、こうした様々な環境に関わる問題を研究するために設置された組織で、4名の



ブラジャヤ湖視察(マレーシア・新首都ブラジャヤ)

専任教員と約30名のセンター研究員から構成されています。「総合」という名の通り、研究テーマは幅広く、環境教育、環境経済、環境政策、地域・生活環境、湖沼・流域に関する研究などを行っています。また、「総合」という言葉の意味は単に幅広いだけでなく、様々な専門領域を持つ研究者が互いに交流することによって、より深みのある研究をしていこうという意味も含まれています。

滋賀大学は、琵琶湖の畔にある大学として、中でも湖沼・流域に関する研究に長い伝統の歴史を持っています。最近では、国際湖沼環境委員会(ILEC)や国連環境計画(UNEP)あるいは世界各国の大学や研究機関の研究者などとともに統合的湖沼流域管理に関する研究を進めています。統合的湖沼流域管理とは、従来は政府の一部の機関だけで湖沼と流域の管理の政策を決めていたものを、関係する組織や市民と協力して、単に洪水が起こらないようにとか(治水とい

います)、必要な水を取水するとか(利水といいます)だけでなく、湖沼の生態系や周辺の文化などの特徴を十分にふまえた上で、計画・管理していこうという考え方です。

例えば、今年は、タイ、マレーシア、インド、米国などを訪問し、現地の湖沼流域管理の実態調査を行い、現地の行政官や研究者と意見交換などを行いました。タイ、マレーシアには学部学生3名も同行し、学生ならではの視点から、各国の抱えている課題などの発見を行い、現在その解決に向けた研究を始めたところです。

センターのこうした研究の成果は、センターの発行する年報やその他の学術雑誌などで発表され、更なる研究の発展につながったり、政策をつくる際の資料となったりして、社会に還元されます。また、一般の方にも広くその成果を知っていただけるように、毎年開かれる「びわ湖環境ビジネスメッセ」でパネル展示をしたり、公開研究会を開いたりしています。

その他の活動としては、環境学習支援士養成プログラムや淡海生涯カレッジを滋賀大学社会連携研究センター(旧・生涯学習教育研究センターなど3つのセンターを改組して昨年発足)と共催したり、JICA(国際協力機構)の研修や教員免許状更新講習の講師派遣などを通じて地域ニーズに応じた社会貢献を行っています。

環境総合研究センターのこうした活動が環境に関わる問題の解決につながり、その問題に苦しんでいる人々の幸せにわずかでも貢献できたらと願っています。



ペラ湖調査(マレーシア・パハン州)